

解題

史館茗話

一卷

林

懋著

林懋は、徳川幕府の儒官にしては、鷲峯の長男なり、字は孟著、一の字は春信、梅洞又た勉亭と號す、又三郎と稱す、幼より聰慧にして、博く群書に通じ、最も詩を善くす、寛文中、鷲峯幕命を奉じて、本朝通鑑を修す、梅洞亦之に與れり、史館退休の暇に、我邦中古以來の藝苑の遺事を聚め、名けて史館茗話といふ、書未だ成らず、寛文六年九月朔疾を以て歿す、齡僅に二十四、父鷲峯深く之を悲痛し、之を完成せんとし、暇ある毎に筆を執りて、其の後に綴る、梅洞の聚むる所凡そ四十二件なり、因て之を補足して、一百條とし、爲めに序と跋とを作りて、其の由來を述べたり、太宰春臺、大東世語を作る、多く材を此書に取ると、清田懋^{キタ}二書を評して曰く、彩色の美は世語に在り、古色蔚然として一時の情狀宛然たるは茗話に在りと。

史館茗話序

父逝而子繼其志者順而易子先而父成其志者逆而難今有一難事梅洞林郎君從家嚴弘文院學士預國史編纂之事史館退休之暇撫本朝中古以來王公卿士跂步詩壇遊藝文苑之遺事若干條加以料案名曰史館茗話至四十二件未終其編蓋有以漸積成之志乎丙午之秋不幸罹疾不起而卒雖無半面識者無不惜其才况於父子之情乎爾後學士得此一冊于筐底見而悲悲而復讀手澤尚新音容宛在耳目豈翹殘藥故衣之謂而已於是抑淚拾其遺探其餘併爲百件嗚呼非父成子志之難乎原夫本邦之古朝家文章不乏其人逮于王綱解紐世道么麼文章與時隆汙遂至於禪林風月之徒竊執其柄以爲己業不亦異乎吁搢紳處士有志之輩讀

此等編執文章爲吾家舊物以勵復古功業則不爲無補于不朽之盛事乎是林家名父子期後學之微意也僕偶借寫之因加訓點以便童觀遂爲之序

寬文第七歲丁未秋日

端亭辻達謹書

史館茗話

梅洞林 懋撰

嵯峨天皇巧詞藻常與野篁成文字戲一日幸河陽館題一聯曰閉閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船示篁篁曰聖作恰好但改遙爲空乎天皇駭然曰此句汝知之乎對曰不知天皇曰是白居易之吟也本作空今以遙字換之耳抑足下與白居易異域同情乎可歎可歎篁莞爾而退時白氏文集一初傳于本朝藏在御府世人未見之

高雄山鎮橋廣相作序昔是善作銘藤敏行書世以爲三絕

嵯峨天皇詞藻に巧なり常に野篁と文字の戯れを成す一日河陽館に幸し一聯を題して曰く閣を閉ぢて唯聞く朝暮の鼓樓に登りて遙に望む往來の船と篁に示す篁曰く聖作恰好但だ遙を改めて空と爲さむかと天皇駭然として曰く此の句汝之れを知るか對へて曰く知らず天皇曰く是れ白居易の吟なり本と空に作る今遙の字を以て之れに換ふるのみ抑も足下と白居易と異域同情か歎すべし歎すべし篁莞爾として退く時に白氏文集一初て本朝に傳はり藏めて御府に在り世人未だ之れを見ず

高雄山の鎮橋廣相序を作り昔是善銘を作り藤敏行書世に以て三絶と爲す

橘廣相九歳昇殿奉詔作暮春吟曰荒村桃李猶應愛何況九重城裡春。

都良香乘月過羅城門得一聯吟曰氣霽風梳新柳髮冰消波洗舊苔鬢門邊有鬼歎曰殊妙也其文章之動鬼如此。

都良香遊竹生島偶吟一句曰三千世界眼中盡未得其對島神颯聲曰十二因緣心裏空。

菅相幼而穎敏十一歲時椿府是善試問曰兒若作詩可賦寒夜卽事乃應聲曰月耀如晴雪梅花似照星可憐金鏡轉庭上玉房馨是善喜之。

菅相春娃無氣力詩序羅綺之爲重衣妬無情於機婦管絃之在長曲怒不闕於伶人世

橘廣相九歳にして昇殿し詔を奉じて暮春の吟を作りて曰く「荒村の桃李猶應に愛すべし、何ぞ況や九重城裡の春をや。」

都良香、月に乘じて羅城門を過ぐ、一聯を得て吟じて曰く「氣霽れては風新柳の髮を梳り、冰消ては波舊苔の鬢を洗ふ」と、門邊に鬼あり、歎じて曰く「殊に妙なり」と、其の文章の鬼を動すこと此の如し。

都良香、竹生島に遊び、偶、一句を吟じて曰く「三千世界は眼中に盡くと、未だ其の對を得ず、島神聲を聽けて曰く、「十二因緣は心裏に空し。」

菅相、幼にして穎敏なり、十一歳の時、椿府は善、試に問ひて曰く「兒若し詩を作らば、寒夜の卽事を賦すべし、乃ち聲に應じて曰く、月耀は晴雪の如く、梅花は照星に似たり、憐むべし、金鏡の轉じて、庭上玉房馨しきことを」と、是善之れを喜ぶ。

菅相、春娃氣力無き詩の序は、羅綺の重衣たる、情無きことを機婦に妬み、管絃の長曲に在る、闕らざること伶人に怒る、世人傳へて之れを稱す、他日、菅相人に語けて

人傳稱之、他日菅相語人曰、是我得意之文也。

菅相曰、溫庭筠詩體優長、予常愛之。

菅相在貶所三年、行住坐臥、不過一室、鬱鬱送日、都府樓在眼、不能往登焉、觀音寺在近、不能往遊焉、偶得一聯、曰、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、自謂似樂天詩也。

紀長谷雄十八、頗知屬文、時無援助、未遇提獎、都良香爲當時高才、長谷雄雖列其門徒、未及知名、一日北堂諸生群飲、同賦幽人釣春水詩、良香獨擢長谷雄詩、曰、綴韻之間、甚得風骨、依此一言、漸增聲價。

人或嘗歎紀長谷雄博學英才、善清行、晒曰、長谷雄固有英才、其博學則吾不知也、長谷

曰、是れ我が得意の文なりと。

菅相曰く、溫庭筠の詩體優長なり、予常に之れを愛す。

菅相、貶所に在ること三年、行住坐臥、一室に過ぎず、鬱々として日を送る、都府樓眼に在り、往きて登ること能はず、觀音寺近きに在り、往きて遊ぶこと能はず、偶一聯を得たり、曰く、都府樓纔に瓦色を看、觀音寺只だ鐘聲を聽く、自ら謂へらく、樂天の詩に似たりと。

紀長谷雄、十八にして、頗る文を屬することを知る、時に援助無くして、未だ提獎に遇はず、都良香、當時の高才たり、長谷雄、其の門徒に列すと雖も、未だ名を知らるゝに及ばず、一日、北堂の諸生群飲し、同じく幽人春水に釣る詩を賦す、良香、獨り長谷雄の詩を擢で、曰く、綴韻の間、甚だ風骨を得たりと、此一言に依りて、漸く聲價を増す。

人嘗て紀長谷雄の博學英才を歎ずることあり、善清行、晒ひて曰く、長谷雄、固に英才あり、其の博學は則吾れ知らざるなり、長谷雄、當時に在りて、太だ推重せらる、然れ

324
雄在當時太被推重、然其輕侮如此。

紀長谷雄侍内宴賦草樹迎春詩曰庭增氣色晴沙碧林變容輝宿雪紅膏相乘醉執其手曰元白再生恐難及乎。

宗岡秋津奉試登第、天皇賜書曰秋津久在學館齡算已積、頻逢數年之課試、常歎一身之淪落、方今適擅擗藻之美、以入桂攀之列、云云、秋津感詔旨之辱、拜戴捧出舞蹈大庭乘輿之餘、且歌且行、白髮戴霜、青衫乘月、不覺到建禮門、忽得兩句、曰、今宵奉詔歡無極、建禮門前舞蹈人、高吟三四、傍若無人、衛士異之、問曰、何人、答曰、新進士老學生宗岡秋津也、衛士責曰、此處是建禮門也、匪汝之所到也、况高吟驚耳乎、秋津愕然謝之。

ども其の輕侮せらるゝこと此の如し。

紀長谷雄、内宴に侍し、草樹春を迎ふる詩を賦して曰く「庭は氣色を増して晴沙碧なり、林は容輝を變じて宿雪紅なり、膏相醉に乘じて、其の手を執りて曰く、元白再生すとも、恐らくは及び難からむか。」

宗岡秋津、試を奉じて登第す、天皇書を賜ひて曰く、秋津久しく學館に在りて、齡算已に積む、頻に數年の課試に逢ひて、常に一身の淪落を歎す、方今適に擗藻の美を擅にし、以て攀桂の列に入る云々、秋津、詔旨の辱きに感じ、拜戴して捧げ出で、大庭に舞蹈す、輿に乗するの餘、且つ歌ひ且つ行く、白髮霜を戴き、青衫月に乘じて、覺へず建禮門に到る、忽ち兩句を得たり、曰く、今宵詔を奉じて、歡び極り無し、建禮門前舞蹈の人と、高吟すること三四、傍に人無きが若し、衛士之を異とし、問ひて曰く、何人ぞ、答へて曰く、新進士老學生宗岡秋津なり、衛士責めて曰く、此の處は是れ建禮門なり、汝の到るべき所に匪ず、况や高吟耳を驚すをやと秋津愕然として之れを謝せり。

菅淳茂八月十五夜陪亭子院賦月影滿秋池詩曰碧浪金波三五初秋風計會似空虛自疑荷葉凝霜早人道蘆花過雨餘岸白遼迷松上鶴潭融可算藻中魚瑤池便是尋常號此夜清明玉不如上皇吟誦數回嘆曰神也妙也恨不使先公見之先公指菅相也。

藤忠文爲征東大將軍向東海道途過駿之清見關眺滄波之淼茫時軍監清原滋藤吟杜荀鶴所謂漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山兩句忠文歎其在軍中而不忘文事。

天曆帝召江朝綱菅文時論白樂天詩玉音曰汝等歸家緝彼集擇其尤者一首書以奏進之翌日朝參各捧一紙于御床下帝閱之則共是送蕭處士遊黔南之詩也帝歎曰二

菅淳茂八月十五夜亭子院に陪し月影秋池に滿つる詩を賦して曰く碧浪金波三五の初秋風計會空虛に似たり自ら疑ふ荷葉霜に凝るの早きかと人は道ふ蘆花雨に過るの餘岸白くして還つて迷ふ松上の鶴潭融して算ふべし藻中の魚瑤池便ち是れ尋常の號此夜清明玉も如かず上皇吟誦數回嘆じて曰く神なり妙なり恨むらくは先公をして之れを見せしめざるをと先公とは菅相を指すなり。

藤忠文征東大將軍と爲りて東海道に向ふ途駿の清見關を過ぎ滄波の淼茫たるを眺む時に軍監清原滋藤杜荀鶴の謂ゆる漁舟の火影寒して浪を燒き驛路の鈴聲夜山を過ぐの兩句を吟ず忠文其の軍中に在りて而して文事を忘れざることを歎す。

天曆帝江朝綱菅文時を召し白樂天の詩を論ず玉音に曰く汝等家に歸りて彼の集を緝き其の尤なる者一首を擇び書して以て之れを奏進せよと翌日朝參各一紙を御床の下に捧ぐ帝之れを閱すれば則共にはれ蕭處士が黔南に遊ぶを送るの詩なり帝歎して曰く二人の胸中符節を合せたるが如し。

人胸中如合符節。

朝綱愛白樂天文章慕其爲人、一夕夢與樂天遇接語、從此文章日進。

江朝綱餞渤海客裴璆詩序、前途程遠馳思於鴈山之暮雲、後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚、璆太感歎之、經年彼國人遇我邦之人、問曰、朝綱爲相公乎、否、答曰、未也、彼曰、貴邦何不重文才哉。

江朝綱暮春詩曰、落花狼籍風狂後、啼鳥籠鐘雨打時、世人以爲確對。

江納言夢菅相來告曰、公之才學勝朝綱、覺後大喜、自書于日錄之中、然時論僉謂其文筆與朝綱相去遠矣。

江朝綱菅文時、同時才名相敵、其所作之詩、

朝綱白樂天の文章を愛し、其の人と爲りを慕ふ、一夕夢に樂天と遇ひ語を接す、此れより文章日に進む。

江朝綱、渤海の客裴璆キウに餞する餞の序に、前途程遠し、思を雁山の暮雲に馳す、後會期遙なり、纓を鴻臚の曉淚に霑す、璆太だ之れを感歎す、年を経て、彼の國人我が邦の人に遇ひ、問ひて曰く、朝綱、相公と爲りしや否やと、答へて曰く、未しなりと、彼曰く、貴邦何ぞ文才を重んぜざるや。

江朝綱、暮春の詩に曰く、落花狼籍風の狂する後、啼鳥籠鐘雨の打つ時、世人以て確對と爲す。

江納言、夢に菅相來り告げて曰く、公の才學、朝綱に勝れりと、覺めて後、太に喜び、自ら日錄の中に書す、然れども時論僉謂へらく、其の文筆、朝綱と相去ること遠しと。

江朝綱、菅文時、時を同じくして才名相敵す、其の作る所

往往相類、朝綱語人曰、後來以予及文時爲一雙乎、菅江一雙之語、權輿于此。

藤在衡、尙齒會、菅雅規亦應招作詩曰、醉對落花心自靜、眠思餘草淚先紅、以靜對紅、人皆奇之。

統理平巧詩、沒後菅文時自書其集、常讀之曰、先輩之作、不易及也。

村上帝設內宴、召羣臣、賦宮鶯囀曉光詩、帝亦乘輿賦詩曰、露濃緩語園花底、月落高歌御柳陰、自謂諸才子不及之、既而文時獻詩曰、西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏音、帝歎曰、是亦絕作也、乃召文時問其勝劣、文時曰、聖作神妙、非臣所及也、帝曰、卿宜吐露情實、勿憚御製、文時恐惶無言、帝固請再三、文時

の詩往往相類す、朝綱人に語けて曰く、後來予及び文時を以て一雙と爲さむかと、菅江一雙の語此に權輿す。

藤在衡、尙齒會を設く、菅雅規も亦招に應じ、詩を作りて曰く、醉うて落花に對して心自ら靜なり、眠つて餘草を思へば淚先づ紅なり、靜を以て紅に對す、人皆之れを奇とす。

統理平、詩を巧にす、沒して後菅文時自ら其の集に書し、常に之れを讀みて曰く、先輩の作及び易からざるなり。

村上帝、内宴を設け、羣臣を召し、宮鶯曉光に囀する詩を賦せしむ、帝も亦輿に乗じ詩を賦して曰く、露濃にして緩く語る園花の底、月落ちて高く歌ふ御柳の陰、自ら謂へらく、諸才子之れに及ばじと、既にして文時詩を獻して曰く、西樓月落つ花間の曲、中殿燈は殘す竹裏の音と、帝歎じて曰く、是れ亦絶作なり、乃ち文時を召して、其の勝劣を問ふ、文時曰く、聖作神妙、臣の及ぶ所に非ず、帝曰く、卿宜しく情實を吐露すべし、御製を憚ること勿れ、文時恐惶言ふ無し、帝固く請ふこと再三、文時曰く、實に聖作拙吟より下れること一等と、帝笑ふ。

曰、實聖作下于拙吟一等帝吟。

源英明夏日作池冷水無三伏夏松高風有一聲秋蒼文時在側曰宜以池改水水改池以松改風風改松滿座歎曰菅博士可謂老詩人也。

菅三品沒後歷年少年豪客追慕昔遊乘月過其舊跡吟月升百尺樓一句有一老嫗出自蓬蒿之間曰今夕之遊其樂哉唯恨所吟之句與三品所曾唱其訓點不同此句意非月之升樓而人之乘月升樓也遊客異之間曰汝者爲誰答曰妾是三品家之曝衣老婢也聞者赧然而去。

菅庶幾餞別詩得一句曰一葉舟飛不待秋吟誦數回未得其對江朝綱曰盍詠燈乎庶

源英明夏日の作に池冷にして水に三伏の夏無く松高くして風に一聲の秋あり蒼文時、側に在りて曰く、宜しく池を以て水に改め、水を池に改め、松を以て風に改め、風を松に改むべしと、滿座歎じて曰く、菅博士は、詩に老けたる人と謂ふべし。

菅三品沒して後年を歴、少年豪客、昔遊を追慕し、月に乘じて其の舊跡に過り、月は百尺の樓に升るの一句を吟ず、一老嫗あり、蓬蒿の間より出でて曰く、今夕の遊、其れ樂しいかな、唯だ恨むらくは、吟する所の句、三品の會て唱ふる所と、其の訓點同じからざるを、此の句意、月の樓に升るに非ずして、人の月に乘じて樓に升るなり、遊客之れを異とし、問ひて曰く、汝は誰とかする、答へて曰く、妾は是れ三品の家の衣を曝す老婢なり、聞くる者、赧然として去る。

菅庶幾の餞別の詩、一句を得たり、曰く、一葉舟飛んで秋を待たず、吟誦數回、未だ其の對を得ず、江朝綱曰く、盍ぞ燈を詠せざると、庶幾乃悟り、之れを足成して曰く、九枝

幾乃悟、足成之、曰九枝燈、盡唯期曉。

小野國風奉試賦、無爲而治、詩曰、刑鞭蒲朽、螢空去、諫鼓苦深、鳥不驚、奏覽之日、帝擊節而歎之、或曰、此句江朝綱所作也。

橋直幹鄰家詩、春煙遞、讓簾前色、曉浪潛分枕上聲、自以爲得意之句也。

橋直幹遊石山寺詩曰、蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲、世人稱之、後來僧奮然入、宋以此一聯爲己所作、雲改霞、鳥改蟲、以呈之、宋人曰、佳句也、但以霞改雲、以蟲改鳥乎、奮然啞退。

源順會得一聯曰、楊貴妃歸唐帝思、李夫人去漢皇情、乃欲足成之、未得其題、數年之後、八月十五夜、陪具平親王于六條宮、賦對雨

燈盡きて唯だ曉を期す。」

小野國風の奉試、無爲にして而して治るを賦する詩に曰く、「刑鞭蒲朽ちて螢空しく去り、諫鼓苦深うして鳥驚かず、奏覽の日、帝節を擊ちて之れを歎す、或曰く、此の句、江朝綱の作る所なり。」

橋直幹の隣家の詩に、春煙遞に讓る簾前の色、曉浪潛に分つ枕上の聲、自ら以爲へらく、得意の詩なりと。

橋直幹、石山寺に遊ぶ詩に曰く、蒼波路遠して雲千里、白霧山は深し鳥一聲、世人之れを稱す、後來僧奮然宋に入り、此の一聯を以て己の作る所と爲し、雲を霞に改め、鳥を蟲に改め、以て之れを呈す、宋人曰く、佳句なり、但だ霞を以て雲に改め、蟲を以て鳥に改めむか、奮然啞ひて退く。

源順會得一聯を得て曰く、楊貴妃歸る唐帝の思、李夫人去る漢皇の情、乃ち之れを足成せんと欲し、未だ其の題を得ず、數年の後、八月十五日夜、具平親王に六條の宮に陪し、雨に對して月を戀ふる詩を賦して、律詩を作り、彼

戀月詩作律詩、以彼句爲頸聯、翌日都下傳誦曰、順得引題之妙、順聞而咲曰、是腹蕘也。

具平親王問當時文人優劣于慶保胤、對曰、江匡衡如敢死之士、數百騎被介冑策驕、其鋒森然、少敢當者、紀齊名如瑞雪之朝瑤臺之上、彈箏、江以言如白沙庭前、翠松陰下、奏陵王、又問曰、足下如何、對曰、似舊上達部、駕毛車時時有隱聲。

江匡衡對策文、太公望之遇周文、涓濱之浪疊、面綺里季之助漢惠、商山之月低、眉蒼文時曰、可喜可喜、但改作面疊、涓濱之浪、眉低、商山之月乎。

江以言賦山水唯紅葉詩曰、外物獨醒松澗色、江匡衡書之于冠筥、示人曰、以言之詩可

の句を以て頸聯と爲す、翌日都下傳誦して曰く、順引題の妙を得たりと、順聞きて咲ひて曰く、是れ腹蕘なり。

具平親王、當時の文人の優劣を慶保胤ウツノに問ふ、對へて曰く、江匡衡は敢死の士の數百騎を被り驕驕に策つが如し、其の鋒森然として敢て當る者少なり、紀齊名は瑞雪の朝瑤臺の上に箏を彈ずるが如し、江以言は白沙庭前、翠松陰下に陵王を奏するが如し、又問ひて曰く、足下は如何んと、對へて曰く、舊上達部フルカミダチノの毛車に駕し、時々隱聲有るに似たり。

江匡衡の對策の文に、太公望の周文に遇へる、涓濱の浪、面に疊み、綺里季の漢惠を助くる、商山の月眉に低る、蒼文時曰く、喜おべし喜おべし、但だ改めて、面、涓濱の浪を疊み、眉、商山の月を低るに作らむか。

江以言、山水唯だ紅葉を賦する詩に曰く、外物獨醒む松澗の色、江匡衡之れを冠の筥に書して、人に示して曰く、以言の詩日に新なりと謂ふべし。

謂日新。

江以言晴後山川清詩歸嵩鶴舞日高見飲
酒龍昇雲不殘或人難曰龍昇二字禁忌云
云以言微笑。

紀齊名有詩名一條帝詔加倭訓于元稹集
齊名曰凡庸之才不可妄加倭訓固辭不從
紀齊名與江以言齊名會同奉省試賦秋未
出詩境詩齊名詩霜花後發詞林曉風葉前
驅筆驛程以言詩文峰按轡駒過影詞海蟻
舟葉落聲具平親王密見其草改駒過影爲
白駒影改葉落聲爲紅葉聲及兩詩並出人
皆以以言詩爲優齊名不悅聞具平改其草
而彌不悅其後齊名將死具平往問之齊名
目具平曰年來文壇之交不可忘也今日貧

史館老話

江以言の晴後山川清しの詩に嵩に歸る鶴舞うて日高く
見え酒に飲む龍昇つて雲残らず或人難じて曰く龍昇
の二字禁忌と云云以言微笑す。

紀齊名詩名あり一條帝詔して倭訓を元稹の集に加へ
しむ齊名曰く凡庸の才妄に倭訓を加ふべからず固辭
して從はず。

紀齊名江以言と名を齊くす會て同じく省試を奉じ秋
未だ詩境を出でざるの詩を賦す齊名の詩に霜花後に
發す詞林の曉風葉前に驅る筆驛程以言の詩に文峯轡
を按ず駒の過ぐる影詞海舟を觸す葉の落つる聲具平
親王密に其の草を見て駒の過ぐる影を改めて白駒の
影と爲し葉の落つる聲を改めて紅葉の聲と爲す兩詩
並び出づるに及びて人皆以言の詩を以て優れりと爲
す齊名悦びず具平其の草を改むと聞き而して彌悦び
ず其の後齊名將に死せむとす具平往きて之れを問ふ
齊名具平を曰して曰く年來文壇の交忘るべからず今
日貧賤多謝多謝但だ以言の詩草を改むるの一件遺憾

一一

臨多謝多謝、但改以言詩草之一件、遺憾未散、言畢而瞑、人皆惑之。

源爲憲、每有文會、携一囊以赴焉、偶有可喜之句、則入其頭於囊中、而吟哦良久、於他人之詩亦然。

藤齊信與藤公任齊名、藤伊周曰、齊信公任可謂敵手也、若譬諸相撲、則公任可擲、齊信不可打、時論以伊周之言爲當。

藤公任辭納言、使紀齊名、江以言作表、然皆不協其心、召江匡衡曰、卿能成我志者也、匡衡歸家、未得其趣、家人赤染教之、曰、彼人驕慢也、良人宜述彼父祖權貴、而其身不登台位、則的當乎、匡衡頷之作、表是之、公任曰善。

江匡房論紀齊名、江以言文才、曰、齊名以言、

未だ散せずと、言畢りて瞑す、人皆之れを惑ひ。

源爲憲、文會有る毎に、一囊を携へて以て赴く、偶喜ぶべきの句有るときは、則其の頭を囊中に入れ、而して吟哦すること良久し、他人の詩に於ても亦然り。

藤齊信、藤公任と名を齊くす、藤伊周曰く、齊信公任、敵手と謂ふべし、若し諸れを相撲に譬へば、則公任は擲つべく、齊信は打つべからずと、時論、伊周の言を以て當れりと爲す。

藤公任、納言を辭す、紀齊名、江以言をして表を作らしむ、然れども其の心に協はず、江匡衡を召して曰く、卿能く我が志を成さむ者なりと、匡衡家に歸りて、未だ其の趣を得ず、家人赤染之れに教へて曰く、彼の人驕慢なり、良人宜しく彼の父祖權貴にして、而して其の身台位に登らざるを述ぶべし、則ち的當か、匡衡之れを頷し、表を作りて之れを呈す、公任曰く善し。

江匡房、紀齊名、江以言の文才を論じて曰く、齊名以言、文

文體各異、齊名文、文句句採、撫古詞、有風騷之體、然至其不得之日、忽不驚目、以無新意故也、以言反之、所作之詩、任意恣詞、却無變策、其體固新、其興彌多、至不得之日、亦非後進之所及也。

或問江匡房曰、本朝才子之中、父子共美者誰哉、答曰、都良香子在中、菅相子淳茂、菅文時子輔昭而已。

右四十二件、亡嗣子懸、史館懋息之間所抄纂也、及其沒後、初見之、而淚之從也、踰月見之、而觀面之話也、隔年讀之、而袖中之珍也、本朝中葉以來、縉紳之徒、唯遊倭歌之林、不窺唐詩之苑、故世人不知中葉以前不乏才子、其蔽至以詩文爲禪林之業、可以痛恨也。

體各異なり、齊名は文々句々、古詞を採撫す、風騷の體あり、然れども、其の得ざるの日に至りては、忽ち目を驚かさず、新意無きを以ての故なり、以言は之れに反す、作る所の詩意に任せ詞を恣にし、卻つて變策無し、其の體固に新に、其の興彌多し、得ざるの日に至りても、亦後進の及ぶ所にあらざるなり。

或江匡房に問ひて曰く、本朝才子の中、父子美を共にする者は誰ぞや、答へて曰く、都良香の子在中、菅相の子淳茂、菅文時の子輔昭のみと。

右四十二件、亡嗣子懸、史館懋息の間、抄纂する所なり、其の沒後に及びて、初めて之れを見、而して涙の從なり、月を踰えて之れを見れば、觀面の話なり、年を隔てて之れを讀めば、袖中の珍なり、本朝、中葉以來、縉紳の徒、唯だ倭歌の林に遊びて、唐詩の苑を窺はず、故に世人、中葉以前、才子に乏しからざるを知らず、其の蔽、詩文を以て、禪林の業と爲すに至る、以て痛恨すべきなり、此の一帖、若し世間に傳らば、則ち窺約の一管ならむか、唯だ惜むら

此一帖若傳世間、則窺豹之一管乎、唯惜彼
 早世猶有所遺也、時想補足之、以成彼志、然
 修史事繁、未能起筆、偶當館休、追懷往事、獨
 坐無伴、永日難消、手把小帖、口誦嘉話、則眼
 不在花、耳不在鶯、猶彼之侍坐于此、如身自
 追還於古、乃記二三件於其末、自今而後、每
 有暇日、遂次積累、以及百件、則豈雷史館之
 茗話而已哉、詩林之玉屑、其庶幾乎、丁未春
 之仲月之閏、館之休、老爺學士、潸淚跋遺帖
 之後、併爲續帖之序。

元慶年中、渤海文籍監裴頤來朝、菅丞相假
 爲禮部侍郎、接遇鴻臚館、贈酬數篇、事見國
 史及菅集、其後延喜年中、渤海裴璆來朝、菅
 淳茂相見賦詩、其一聯曰、裴文籍後聞君久

くは、彼早世、猶遺す所有るを、時に之れを補足し、以て彼
 の志を成さむことを想ふ、然れども、修史の事繁にして、
 未だ筆を起す能はず、偶、館休に當りて、往事を追懷し、獨
 坐伴無く、永日消し難し、手に小帖を把り、口に嘉話を誦
 するときは、則ち眼花に在らず、耳、常に在らず、猶彼の此
 に侍坐するがごとく、身自ら古に追還するが如し、乃ち
 二三件を其の末に記す、今より後、暇日有る毎に、遂次積
 累、以て百件に及ぶときは、則豈に雷史館の茗話のみな
 らむや、詩林の玉屑、其れ庶幾からむか、丁未春の仲月の
 閏、館の休、老爺學士、涙を潸ぎて、遺帖の後に跋し、併せて
 續帖の序と爲す。

元慶年中、渤海の文籍監裴頤來朝す、菅丞相假に禮部侍
 郎と爲りて、鴻臚館に接遇す、贈酬數篇、事は國史及び菅
 集に見えたり、其の後、延喜年中、渤海の裴璆來朝す、菅淳
 茂、相見て詩を賦す、其の一聯に曰く、裴文籍が後君を聞
 くこと久し、菅禮部の孤我を見ること新なり、璆之れを

菅禮部孤見我新、謬吟之垂淚、淳茂者丞相子也、謬者顯子也、異域二代、兩家邂逅、可謂奇遇也。

都良香神仙策曰、三壺雲浮七萬里之程、分浪、五城霞峙十二樓之構、挿天、云云、讀之則覺度量之廣大、後世好事者曰、良香登仙者、乃是依此策文而誇說乎、都香果不爲仙、其卒年見國史。

小野美材奉勅寫白氏詩於御屏、書其後曰、大原居易古詩聖、小野美材今草神、美材翰墨之妙爲時被許、故自言亦云爾。

田達音秋日感懷詩曰、由來感思在秋天、多被當時節物牽、第一傷心何處最、竹風鳴葉月明前、達音與菅相同、時菅集所謂田詩伯

史館者語

吟じて涙を垂る、淳茂は丞相の子なり、謬は顯の子なり、異域二代、兩家邂逅奇遇と謂ふべし。

都良香の神仙策に曰く、三壺雲は浮び七萬里の程浪を分つ、五城霞は峙つ十二樓の構天を挿む云々、之れを讀むときは、則ち度量の廣大なるを覺ゆ、後世事を好む者曰く、良香登仙すとは、乃ち是れ此の策文に依りて而して誇説するか、都香果して仙と爲らず、其の卒年、國史に見えたり。

小野美材、勅を奉じて白氏の詩を御屏に寫す、其の後に書して曰く、大原の居易は古の詩聖、小野の美材は今の草神、美材翰墨の妙時の爲に許さる、故に自ら言ふことも亦云ふこと爾り。

田達音の秋日感懷の詩に曰く、由來感思秋天に在り、多くは當時の節物に牽かる、第一心を傷ましむること何の處か最なる、竹風葉を鳴らす月明の前、達音は菅相とを同うす、菅集に謂ゆる田詩伯とは是れなり、菅公之れ

是也。菅公推之稱詩伯，則其以詩鳴世者可知。然此絕句外所作不多聞。按陽成實錄，元慶年中，菅原道真、島田忠臣赴鴻臚館，與渤海妻文籍贖答。考諸菅集，則田達音也。達音之音與忠臣之訓相通，則果是一人也。紀長谷雄或作發昭，是亦音訓通用可類推焉。

菅丞相撰進其三代家集二十八卷，以獻延喜帝。帝賜御製律詩褒之，其詩曰：門風自古是儒林，今日文華皆悉金。唯詠一聯知氣味，況連三代飽清吟。琢磨寒玉聲聲麗，裁製餘霞句句侵。更有菅家勝白樣，從茲拋卻匣塵深。時人榮之，先是渤海大使裴頌與菅相贈答，謂其詩體似樂天，故御製云爾。末句意旨難解，蓋讀此集則白集可拋擲之義乎。三代

を推して詩伯と稱すれば、則ち其の詩を以て世に鳴る者知るべし。然れども、此の絶句の外に、作る所、多く聞かず。陽成實錄を按ずるに、元慶年中に、菅原道真、島田忠臣、鴻臚館に赴き、渤海の裴文籍と贈答す。諸れを菅集に考ふるときは、則ち田達音なり。達音の音、忠臣の訓と相通するときは、則ち果して是れ一人なり。紀長谷雄或は發昭に作る、是れ亦音訓通用す、類推すべし。

菅丞相、其の三代家集二十八卷を撰集して、以て延喜帝に獻す。帝、御製の律詩を賜ひて之れを褒す。其の詩に曰く、門風古より是れ儒林、今日文華皆悉く金、唯だ一聯を詠じて氣味を知る、況や三代に連ねて清吟に飽くをや、寒玉を琢磨して聲々麗し、餘霞を裁製して、句々侵す、更に菅家の白様に勝る有り、茲れより抛却して匣塵深し。時人之れを榮とす、是れより先き、渤海の大使裴頌、菅相と贈答す、謂へらく、其の詩體樂天に似たりと、故に御製に爾か云ふ、末句の意旨、解し難し、蓋し此の集を讀むときは、則ち白集は抛擲すべきの義か。三代とは、清公是等。

者謂清公是善及右相也、右相文藻今猶存焉、二代集不傳、可以惜焉。

昌泰之初、菅丞相侍重陽宴、賦菊、其一聯曰、謙德晚開秋月杪、勁心寒立曉霜前、時人嘆服其守持之貞固也。

昌泰二年重陽宴、以菊散一叢金爲題、菅相詩曰、不是秋江鍊白沙、黃金化出滿叢花、微臣采得簾中滿、豈若一經遺在家、其身既貴、然遺次不忘家業者、可以見焉、且夫諷諭之意自在其中、不可不著意也、紀長谷雄詩曰、廉士路中疑不拾、道家煙裏誤應燒、菅相太褒之、三善清行詩曰、郵縣村閭皆富貨、陶家兒子不垂堂、自負此句、然菅相不賞之、清行不悅、宴罷共出到建春門、清行問菅相曰、公

及び右相を謂ふなり、右相の文藻今猶存す、二代の集傳らず、以て惜むべし。

昌泰の初、菅丞相、重陽の宴に侍して菊を賦す、其の一聯に曰く、謙德晚く開く秋月の杪、勁心寒く立つ曉霜の前、と、時人其の守持の貞固なるに嘆服す。

昌泰二年、重陽の宴に菊は一叢の金を散するを以て題と爲す、菅相の詩に曰く、是れ秋江白沙を鍊するにあらず、黄金化出す滿叢の花、微臣采り得て簾中に滿つ、豈に一經の遺して家に在るに若かむや、と、其身既に貴し、然れども、遺次も家業を忘れざる者、以て見るべし、且つ夫れ諷諭の意、自ら其の中に在り、意を著けざるべからざるなり、紀長谷雄の詩に曰く、廉士路中疑つて拾はず、道家煙裏誤つて應に燒くべし、菅相太だ之れを褒す、三善清行の詩に曰く、郵縣の村閭皆貨に富めり、陶家の兒子堂に垂せず、此の句を自負す、然れども、菅相之れを賞せず、清行悦びず、宴罷みて、共に出で、建春門に到る、清行、菅相に問ひて曰く、公何を我が詩を取らざるや、公曰く、富貨の字穩ならず、之れを改めて、屋を潤すと爲さば、恰

何不取我詩哉。公曰：富貨字不穩，改之爲「潤屋恰好，清行乃改畫之」。

菅相客舍對雪一聯曰：立於庭上頭爲鶴，坐在爐邊手不龜。句云：意云：其用字可謂佳對也。

菅家自題其畫像曰：眞圖對我無詩興，恨寫衣冠不寫情。蓋其畫花者，繪色不繪香之意，暗合乎。

渤海裴謬歸國，都在中在越前接遇之臨別贈詩，其末句曰：與君後會應無定，從此懸望北海風。謬太感賞之，朝議謂不奉詔私與外國贈答，欲責問之，然以其句爲外客被稱，故宥之。

江朝綱及第詩，以兩音字爲平聲用之，博士

好ならむ、清行乃ち之れを改め書す。

菅相客舍雪に對する一聯に曰く、立つて庭上に於てすれば頭鶴と爲り、坐して爐邊に在れば手龜らず」と、句と云ひ意と云ひ、其の字を用ふるゝと、佳對と謂ふべきなり。

菅家自ら其の畫像に題して曰く、眞圖我に對して詩興無し、恨むらくは衣冠を寫して情を寫さざるを」と、蓋し其れ花を畫く者は、色を繪きて香を繪かざるの意、暗合するか。

渤海の裴謬國に歸るとき、都在中、越前に在りて之れに接遇す、別れに臨みて詩を贈る、其の末句に曰く、君と後會應に定め無かるべし、此れ従り懸に望む北海の風、謬太だ之れを感賞す、朝議謂へらく、詔を奉せずして、私に外國と贈答す、と之れを責問せむと欲す、然れども、其の句、外客の爲に稱せらるゝを以て、故に之れを宥す。

江朝綱の及第の詩に、兩音の字を以て平聲と爲して之れ

等難之、朝綱引蒼相詩所謂鶴飛千里未離地、離字兩音、然爲平聲用之、博士等猶未服之、欲處落第、延喜帝聞之、詔曰、當時博士何及蒼相哉、朝綱遂及第、此外兩音字爲平聲、則時議紛紜、蓋其本朝之習俗乎。

江朝綱賦、王昭君曰、胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸、可謂秀句也、時人或難霜字與腸同韻也、想夫妬其才、強欲求疵乎。

江朝綱音文時同會某皇孫宅、見花賦詩、朝綱吟曰、此花非是人間種、瓊樹枝頭第二花、文時句曰、此花非是人間種、再養平臺一片霞、上七字不違一字、下句共言梁園之事、此皇孫不詳爲何親王子、然爲第二郎、故曰第二花也、曰再養、寓爲皇孫之意、其取事用字、

を用ふ、博士等之れを難す、朝綱蒼相の詩に謂ゆる、鶴は千里に飛んで未だ地を離れずといふを引きて曰く、離の字兩音、然れども、平聲と爲して之れを用ひたりと、博士等猶未だ之れに服せず、落第に處せむと欲す、延喜帝之れを聞き、詔して曰く、當時の博士、何ぞ蒼相に及ばむやと、朝綱遂に及第す、此の外、兩音の字、平聲と爲すときは、則ち時議紛紜たり、蓋し其れ本朝の習俗か。

江朝綱、王昭君を賦して曰く、胡角一聲霜後の夢、漢宮萬里月前の腸と秀句と謂ふべし、時人或は霜の字、腸と同韻なるを難す、想ふに、夫れ其の才を妬みて、強ひて疵を求めむと欲するか。

江朝綱音文時、同じく某皇孫の宅に會し、花を見て詩を賦す、朝綱吟じて曰く、此の花はれ人間の種に非ず、瓊樹枝頭第二の花、文時の句に曰く、此の花はれ人間の種に非ず、再び平臺一片の霞を養ふ、上の七字、一字を違へず、下の句、共に梁園の事を言ふ、此の皇孫は、何れの親王の子たることを詳にせず、然れども、第二郎たり、故に第二の花と曰ふなり、再び養ふと曰ふは、皇孫たるの意を寓す、其の事を取り字を用ふる、彼れ此れ優劣無し、之れを

彼此無優劣、謂之二妙乎、謂之聯璧乎。

村上帝遊冷泉院、召文人、賜花光水上浮題、勅菅文時作序、序遲成、屢促之、猶未成、乘輿既將還、時序成獻之、帝勅藤雅材讀之、停駕聞之、序中有誰謂水無心、濃艶臨兮波變色、誰謂花不語、輕漾激兮影動唇之詞、帝大感賞之、再開雅筵、以到天明。

菅三品代源雅信辭大臣表曰、傅氏巖之嵐、雖風雲於殷夢之後、嚴陵瀨之水、猶涇渭於漢聘之初、風雲涇渭之字、自非著工夫、則不易言焉、二箇故事尋常之話、曰風雲曰涇渭、而太有意味。

菅文時懷舊一聯曰、桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰棲、時人嘆美之。

二妙と謂はむか、之れを聯璧と謂はむか。

村上帝、冷泉院に遊び、文人を召し、花光水上に浮ぶの題を賜ひ、菅文時に勅して序を作らしむ。序遅く成る、屢之れを促す、猶未だ成らず、乘輿既に將に還らむとす、時に序成りて之れを獻す、帝藤雅材に勅して之れを讀ましめ、駕を停めてて之れを聞く、序中に、誰か謂ふ水に心無しと、濃艶臨んで波色を變ず、誰か謂ふ花語らずと、輕漾激して影唇を動すの詞あり、帝大に之れを感賞し、再び雅筵を開き、以て天明に到る。

菅三品、源雅信に代りて、大臣を辭する表に曰く、傅氏巖の嵐、殷夢の後に風雲なりと雖も、嚴陵瀨の水、猶漢聘の初に涇渭なり、風雲涇渭の字、工夫を著くるに非ざるよりは、則ち言ひ易からず、二箇の故事、尋常の話にして、風雲と曰ひ涇渭と曰ひて、而して太だ意味あり。

菅文時の懷舊の一聯に曰く、桃李言はず春幾たびか暮る、煙霞跡無し昔誰か棲みしと、時人之れを嘆美す。

菅文時代清慎公辭左大將表曰隴山雲暗、
李將軍之在家、潁水浪閑、祭征虜之未仕、川
李廣祭遼之事、遍傳都下、到處無不說之、見
者無不感之、一夕盜數輩過文時門、窺之、問
闈人曰、主人爲誰、答曰、作隴山雲暗之詞之
人也、盜聞之曰、此是當時之奇才也、可畏可
畏、乃走而去。

安和帝讓位之後、在冷泉院、召文人、賦隔花
遙勸酒詩、以菅輔昭爲序者、自題出至會期、
留輔昭於院中、不與其父文時通問、疑其有
助筆也、其序末曰、泝於李門之浪、二年、朝恩
未及、躑於蓬壺之雲、十日、夜飲既酣、後日文
時見之曰、言十日似屈、指計日、不若改作一
日也。

菅文時、清慎公に代りて、左大將を辭する表に曰く、隴山
雲暗し、李將軍の家に在る、潁水浪閑なり、祭征虜の未だ
仕へずと、李廣祭遼の事を用ふ、遍く都下に傳はり、到る
處、之れを諒かざる無し、見る者、之れを感ぜざる無し、一
夕、盜數輩、文時の門に過りて、之れを窺ひ、闈人に問ひて
曰く、主人は誰たる、答へて曰く、隴山雲暗の詞を作りし
人なり、盜之れを聞きて曰く、此は是れ當時の奇才なり、
畏る可し、畏るべしと、乃ち走りて去れり。

安和帝讓位の後、冷泉院に在り、文人を召して、花を隔て
て遙に酒を勸むる詩を賦せしむ、菅輔昭を以て序者と爲
す、題出で、より會期に至るまで、輔昭を院中に留め、其
の父文時と問を通ぜしめず、其の助筆あらむことを疑ひ
てなり、其の序の末に曰く、李門の浪に泝ること二年、朝
恩未だ及ばず、蓬壺の雲を躑むこと十日、夜飲既に酣な
り、後日、文時之れを見て曰く、十日と言ふときは、指を屈
して日を計ふるに似たり、改めて一日と作すには若かさ
るなり。

源英明没後、橘直幹題其遺集曰陳孔璋詞空愈病、馬相如賦只凌雲、英明者菅相外孫也、直幹者一時秀才也、其所稱讚如此、英明可謂追外祖風者也。

天曆御宇、文章博士橘直幹上書請兼民部大輔、情小野道風、淨書以獻之、先例爲文章博士者、必兼他官、直幹漏恩、不然、故其書中有言曰、拜除之恩、惟一榮枯之分、不同、依人而異、事雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命、天寬至此、龍顏艷然、其末段曰、瓢箪屢空、草漚顏淵之巷、藜藿深饋、雨濕原憲之樞、至此玉音誦之數回、嘆曰、彼亦一世之文士也、何沈窮之至此乎哉、是朕之過也、即日詔任民部大輔、天皇覽其墨痕、鮮麗曰、是可爲道風之

源英明没して後、橘直幹其の遺集に題して曰く、陳孔璋の詞空しく病を愈し、馬相如の賦只ぞ雪を凌ぐと、英明は菅相の外孫なり、直幹は一時の秀才なり、其の稱讚する所此の如し、英明は外祖の風を追ふ者と謂ふべきなり。

天曆の御宇、文章博士橘直幹上書して、民部大輔を兼ねむと請ふ、小野道風を情ひて、淨書し以て之れを獻す、先例に文章博士たる者は、必ず他官を兼ね、直幹恩に漏れて然らず、故に其の書中に言へるあり、曰く、拜除の恩、惟れ一榮枯の分同じからず、人に依りて而して事を異にす、偏頗に似たりと雖も、天に代りて而して官を授く、誠に運命に懸ると、天覽此に至りて、龍顏艷然、其の末段に曰く、瓢箪屢空し、草漚顏淵の巷に滋し、藜藿深く饋す、雨原憲の樞を濕す、玉音之れを誦すること數回、嘆じて曰く、彼も亦一世の文士なり、何ぞ沈窮することの此に至るや、是れ朕の過なりと、即日詔して、民部大輔に任す、天皇其の墨痕鮮麗なるを覽て曰く、是れ道風の筆たるべし、文と云ひ筆といひ、固に愛配すべし、と而して後常に此の書を御牀の傍に置けり、天徳四年、禁闕火に罹るの日、

筆也。文云筆云、固可愛翫、而後常置。此書於御牀傍。天德四年、禁闕擱火之日、天皇願待臣曰、直幹之書免火乎否、不敢問其餘之珍貨、時人聞之、感天皇之重文也。

菅三品没後、慶保胤遊其舊亭、見一葉落庭、吟曰、鴻漸散間秋色少、鯉常趨處晚聲微、保胤者、三品門人也、上句感時、下句懷舊、鴻漸鯉趨假對之巧者也、但漸字與易文異義、是亦假用也。

源順河原院賦曰、強吳滅兮有荆棘、姑蘇臺之露灑、漢暴秦衰兮無虎狼、咸陽宮之煙片、河原院者、左大臣源融之舊跡也、懷古鑑戒之意共切。

源順聽右中將藤某讀論語、作序曰、職列虎

史館者、話

天皇待臣を顧みて曰く、直幹の書、火を免るゝや否やと、敢て其餘の珍貨を問はざりき、時人之れを聞きて、天皇の文を重んぜらるゝに感ずるなり。

菅三品没して後、慶保胤、其の舊亭に遊び、一葉庭に落つるを見て、吟じて曰く、鴻漸く散ずる間秋色少し、鯉常に趨る處晚聲微なりと、保胤は三品の門人なり、上の句は、時に感じ、下の句は、舊を懷ふ、鴻漸鯉趨、假對の巧なる者なり、但だ漸の字、易の文と義を異にす、是亦假用なり。

源順の河原院の賦に曰く、強吳滅びて荆棘有り、姑蘇臺の露灑々たり、暴秦衰へて虎狼無し、咸陽宮の煙片々たり、河原の院とは、左大臣源融の舊跡なり、懷古鑑戒の意共に切なり。

源順右中將藤某の論語を讀むを聽きて、序を作りて曰く、職、虎牙に列し、武勇を漢の四七の將に拉すと雖も、舉

牙雖拉武勇於漢四七將學抽鱗角遂味文章於魯二十篇其取事用字無遺恨。

源順詠白律詩曰銀河澄朗素秋天又見林園白露圓毛寶龜歸寒浪底王弘使立晚花前蘆洲月色隨潮漲惹嶺雲膚與雪連霜鶴沙鷗皆可愛唯嫌年髯漸皤然可謂佳作也頰聯頸聯用事賦景恰好然起句末句素白皤三字似繁冗乎強離之則頗爲遺恨乎。

橘倚平詩曰楚三閭醒終何益周伯夷饑未必賢伯字與百通音故對三字其句可讀之然非知伯夷屈原者終何益未必賢之詞太覺有費也蓋彼求仕進之心自露出者乎。

藤在衡少在學寮與橘正通友善既而在衡叙五位任式部少輔補藏人昇殿正通猶列

鱗角を抽んづ、遂に文章を魯の二十篇に味ふと、其の事を取り字を用ひぬ、遺恨無し。

源順白を詠する律詩に曰く、銀河澄朗素秋の天、又見る林園白露の圓なるを、毛寶の龜は寒浪の底に歸り、王弘の使は晚花の前に立つ、蘆洲の月色潮に隨つて滿ち、惹嶺の雲膚雪と連る、霜鶴沙鷗皆愛す可し、唯だ嫌ふ年髯の漸く皤然たるを佳作なりと謂ふべきなり、頰聯頸聯事を用ひ景を賦す恰好然れども、起句末句の素白皤の三字、繁冗に似たるか、強ひて之れを離すれば、則ち頗る遺恨と爲さむか。

橘倚平の詩に曰く、楚の三閭醒めて終に何の益あらむ、周の伯夷饑えて未だ必ずしも賢ならず、伯の字、百と音を通ず、故に三の字に對す、其の句之れを讀むべし、然れども、伯夷屈原を知る者に非ず、終に何の益あらむ、未だ必ずしも賢ならずの詞、ただ費を有るを覺ゆ、蓋し彼れ仕進を求むるの心、自ら露出する者か。

藤在衡少うして學寮に在り、橘正通と友とし善し、既にして在衡、五位に叙し、式部少輔に任じ、藏人に補せら

地下、僅至宮内少丞、正通美之、呈一律曰、吏部侍郎職侍中、著緋初出紫微宮、銀魚腰底辭春水、綉鶴衣間舞曉風、花月一窓交昔昵、雲泥萬里眼今窮、省身還恥相知久、君是當初竹馬童、其後在衡官爵追年進、爲公卿、正通漸老不遇、或時列在衡詩筵、作序、末段有言曰、齡亞顏駟過三代、而猶潛恨同伯鸞、歌五噫而將去、去留未定、請垂博愛、源爲憲同席、聞而怪之、旣而正通避世、不知其所、終或曰、到高麗國、以文才爲高官云、後來具平親王題其詩卷曰、君詩一帙淚盈巾、潘謝末流原憲身、黃卷鎮携疎牖月、青衫長帶古叢春、文華留作荆山玉、風骨消爲高里塵、未會茫茫天道理、滿朝朱紫彼何人、蓋深情其陸沈、

れ昇殿す、正通は猶地下に列し、僅に宮内少丞に至る、正通之れを羨み、一律を呈して曰く、吏部侍郎職侍中、緋を著て初めて出づ、紫微宮、銀魚腰底春水を辭し、綉衣間曉風に舞ふ、花月一窓交り昔し昵び、雲泥萬里眼今窮まる、身を省みて還て恥づ相知の久しきを、君は是れ當初竹馬の童、其の後、在衡官爵年を追うて進みて公卿と爲る、正通漸く老いて不遇、或時在衡の詩筵に列し、序を作る、末段に言へるあり曰く、齡顏駟に亞げり、三代を過ぎ而して猶潛めり、恨むらくは、伯鸞に同じ、五噫を歌ひ而して將に去らむとす、去留未だ定らず、請ふ博愛を垂れよと、源爲憲同席、聞きて之れを怪む、旣にして正通世を避け、其の終る所を知らず、或は曰く、高麗國に到り、文才を以て高官と爲ると云ふ、後來、具平親王、其の詩卷に題して曰く、君か詩一帙淚巾に盈つ、潘謝の末流原憲の身、黃卷鎮に携ふ疎牖の月、青衫長に帶ぶ古叢の春、文華留めて荆山の玉と作り、風骨消えて高里の塵と爲る、未だ會せず茫茫たる天道の理、滿朝の朱紫彼れ何人ぞ、蓋し深く其の陸沈を惜むなり。

典藥頭清原某暮春之日曾謁兼明親王親王見庭前黃花吟曰點著雌黃天有意歎冬誤綻暮春風清某問曰是誰人所作親王答曰或人於朱雀院作之以爲佳句故吟之清曰歎冬倭名山不岐然見本章其花冬開非春花也親王感悟曰自今汝來時不可妄吟詩也然則國俗以歎冬爲餘曠傳襲之誤久矣或曰此二句者清慎公所詠也

兼明親王者延喜帝子也博學多才賜源姓官爵頻進至左大臣及藤兼通執政陽尊以爲親王奪其權勢先是兼明有老休之志相攸於龜山至此兼通錮兼明於台嶺不能往龜山鬱陶作菟裘賦其中有言曰扶桑豈無影乎浮雲掩而乍昏叢蘭豈不芳乎秋風吹

典藥頭清原某暮春の日曾て兼明親王に謁す親王庭前の黃花を見て吟じて曰く雌黃を點著す天意あり歎冬誤つて綻ふ暮春の風清某問ひて曰く是誰人の作る所ぞ親王答へて曰く或人朱雀院に於て之れを作る以て佳句と爲す故に之れを吟すと清曰く歎冬の倭名は山不岐然れども本章を見るに其の花冬開く春花に非ざるなりと親王感悟して曰く今より汝來る時妄に詩を吟す可からざるなりと然らば則ち國俗歎冬を以て餘曠と爲すは傳襲の誤り久し或は曰く此の二句は清慎公の詠する所なりと

兼明親王は延喜帝の子なり博學多才源姓を賜はる官爵頻に進みて左大臣に至る藤兼通政を執るに及びて陽尊して以て親王と爲し其の權勢を奪ふ是れより先き兼明老休の志あり攸を龜山に相す此に至りて兼通兼明を台嶺に錮して龜山に往く能はず鬱陶として菟裘の賦を作る其の中に言へるあり曰く扶桑豈に影無からむや浮雲掩うて而して乍ち昏し叢蘭豈に芳からざらむや秋風吹いて而して先づ敗ると且つ其の序に

而先敗、且其序曰、君昏臣諛、無處于愬云云、
 既而兼明薨、其子伊陟愚昧、不知字、一條帝
 問伊陟曰、顯考遺文有幾卷乎、伊陟對曰、遺
 文散逸、唯有兔裘、帝以爲親王所著之裘、使
 伊陟備天覽、伊陟捧一卷、帝怪而開之、初覺
 伊陟不辨菟與兔也、乃使侍臣讀之、至序文
 所謂君昏臣諛、龍顏忽變色、伊陟戰慄、既而
 至扶桑叢蘭之句、太憐親王無罪遭冤、而龍
 顏復初、其後帝不滿於道長專權、宸筆書扶
 桑叢蘭之二句、以納書匣、及帝晏駕、道長入
 御座、初見宸筆二句、自破裂不以示人。

兼明之後有具平、共號中務卿親王、故有前
 後中書王之稱、兼明文在文粹、其詩不多、傳
 具平詩在麗藻、其文存者少也、併見之、則兼

曰く、君昏く臣諛ひて、愬ふるに處無し云々と、既にして
 兼明薨す、其の子伊陟愚昧にして字を知らず、一條帝、伊
 陟に問ひて曰、顯考の遺文幾卷あるか、伊陟對へて曰く、
 遺文散逸、唯だ兔裘ありと、帝以爲へらく、親王著る所の
 裘と、伊陟をして天覽に備へしむ、伊陟一卷を捧ぐ、帝怪
 みて之れを開く、初めて伊陟の菟と兔とを辨ぜざるを
 覺り、乃ち侍臣をして、之れを讀ましむ、序文に、謂ゆる君
 昏く臣諛ふといふに至りて、龍顏忽ち色を變ず、伊陟戰
 慄す、既にして扶桑叢蘭の句に至りて、太だ親王の罪無
 くして冤に遭ふを憐み、而して龍顏初めに復る、其の後
 帝、道長の權を專にするに滿たず、宸筆、扶桑叢蘭の二句
 を書し、以て書匣に納む、帝晏駕するに及びて、道長御座
 に入り、初めて宸筆の二句を見て、自ら破裂して、以て人
 に示さざりき。

兼明の後、具平あり、共に中務卿親王と號す、故に前後中
 書王之稱あり、兼明の文は文粹に在り、其の詩多く傳は
 らず、具平の詩は麗藻に在り、其の文存する者少し、之を
 併せ見れば、則ち兼明の才は具平より高し、然れども、兼

明才高於具平、然兼明之外、本朝王子無及、其平之才者、但兼明之子孫者不顯、具平之子孫者世世有才能、且以與攝家世婚、故官爵亦高。

橘正通源爲憲共爲源順門人也、順隱沒授家集於爲憲、爲憲以爲榮、蓋正通避世在順存時乎、紀齊名者正通弟子也、長德年中、齊名編扶桑集、多載順詩、以其學之所由來也。源爲憲代蕃人一聯曰、故鄉有母秋風淚、旅館無人暮雨魂、讀之想像則誰不垂淚哉。源爲憲登天台山一聯曰、鶴閑翅刷千年雪、僧老眉垂八字霜、蒼文時難之曰、改鶴閑翅爲翅閑鶴、改僧老眉爲眉老僧、而可也、今按上句所難固是、下句眉垂讀得卻好。

明の外、本朝の王子、具平の才に及ぶ者無し、但だ兼明の子孫は顯れず、具平の子孫は、世々才能あり、且つ攝家と世婚するを以て、故に官爵も亦高し。

橘正通源爲憲共に源順の門人たり、順没するに臨みて、家集を爲憲に授く、爲憲以て榮と爲す、蓋し正通の世を避けしは、順の存する時に在るか、紀齊名は、正通の弟子なり、長德年中、齊名、扶桑集を編するとき、多く順の詩を載す、其の學の由りて來る所なるを以てなり。

源爲憲の蕃人に代る一聯に曰く、故郷に母あり秋風の涙、旅館に人無し暮雨の魂と之れと讀みて想像すれば、則ち誰か涙を垂れざらむや。

源爲憲天台山に登る一聯に曰く、鶴閑にして翅千年の雪を刷ひ、僧老いて眉八字の霜を垂る」と蒼文時之れを難じて曰く、鶴閑翅を改めて翅閑鶴と爲し、僧老眉を改めて眉老僧と爲し、而して可なりと、今按するに、上句難する所固に是なり、下句眉垂讀得て卻て好し。

寛弘帝瑤琴治世音御製曰、無爲化出南風曲、有道心聞子野調、以子野對南風、帝之著心於文字、可推知焉、宜哉當時多才子、惜哉奎章不多傳也。

寛弘帝書中有往事之御製曰、百王勝躡開篇見萬代聖賢展卷明其末句押平字、具平親王奉和曰、忽戴君恩還自恥、風聲猶滅漢東平、具平之於帝猶東平之於漢帝、其用事固當。

寛弘帝中殿詩筵、以所貴是賢才爲題、具平親王一聯曰、張公暫入終安漢、陸氏相傳久輔吳、其用事不爲不可、然張陸可謂良佐、於賢才則未也、江以言一聯曰、磻溪跡去雲空宿、傳野道開月獨昇、句與意共於題爲當。

寛弘帝瑤琴治世の音の御製に曰く、無爲の化は南風の曲に出づ、有道の心は子野の調を聞く、子野を以て南風に對す、帝の心を文字に著けしむること、推して知らるべし、宜なるかな、當時才子の多きこと、惜いかな、奎章多く傳はらざることを。

寛弘帝書中に往事有りの御製に曰く、百王の勝躡篇を開いて見、萬代の聖賢卷を展べて明なり、其の末句平の字を押す、具平親王奉和して曰く、忽ち君恩を戴いて還つて自ら恥づ、風聲猶滅す、漢の東平と、具平の帝に於ける、猶東平の漢帝に於けるがごとし、其の事を用ゐる固に當れり。

寛弘帝中殿の詩筵に、貴ぶ所は是れ賢才を以て題と爲す、具平親王の一聯に曰く、張公暫く入つて終に漢を安す、陸氏相傳へて久しく吳を輔く、其の事を用ふる、不可と爲さず、然れども、張陸は良佐と謂ふべし、賢才に於ては則ち未し、江以言の一聯に曰く、磻溪跡去つて雲空しく宿し、傳野道開いて月獨昇る句と意と、共に題に於て當れりと爲す。

藤有國除名之後、再叙三品、侍重陽宴、退而賦七言十韻、其第二聯曰、除名二月花開日、待詔重陽菊綻辰、其第四聯曰、忽拋野服染愁淚、更着朝衣賣老身、染賣二字着意、第五聯曰、遣死空爲黃壤骨、慙生再踏紫宸塵、讀之則可憐生、其用字亦奇、第六聯曰、半焦桐尾雖殘燼、已朽松心免作薪、其取譬可以嘉焉、第七聯曰、籠鶴放雲振泥翅、轍魚得水潤枯鱗、是亦能取譬、其句未穩、第八聯曰、鸞斑蘇武初歸漢、舌在張儀遂入秦、斑在字不對、然用故事以自比焉、但上句歸忠臣固是、下句嘉辯士、其以利口來榮達之思形於言、後果任參議、第九聯曰、運任秋蓬風處轉、榮同朝菌露中新、有意到句不到之評乎、唯起句末、

藤有國、名を除せらるゝの後、再び三品に叙し、重陽の宴に侍し、退きて七言十韻を賦す、其の第二聯に曰く、名を除す二月花の開らく日、詔を待つ重陽菊の綻ぶ辰、其の第四聯に曰く、忽ち野服を抛つて愁涙に染み、更に朝衣を著て老身を賣る、染賣の二字、意を著く、第五聯に曰く、遣に死しては空しく黄壤の骨と爲らむ、慙に生きて再び紫宸の塵を踐む、之れを讀めば、則ち可憐生、其の字を用ふる亦奇なり、第六聯に曰く、半は焦る桐尾燼を殘すと雖も、已に朽る松心薪と作るを免れむや、其の譬を取る、以て嘉すべし、第七聯に曰く、籠鶴雲に放つて泥翅を振ひ、轍魚水を得て枯鱗を潤す、是も亦能く譬を取る、其の句未だ穩ならず、第八聯に曰く、鸞の斑なる蘇武、初めて漢に歸り、舌の在る張儀、遂に秦に入る、斑在の字對せず、然れども、故事を用ひて以て自ら比す、但だ上句忠臣を歸ふ固に是なり、下句辯士を慕ふ、其の利口を以て榮達を求むるの思、言に形る、後に果して參議に任ず、第九聯に曰く、運は秋蓬の風處に轉するに任せ、榮は朝菌の露中に新なるに同じ、意到り句到らざるの評あらむか、唯だ起句末句及び第三聯、稍や劣れり、故に之れを論ぜず。

句及第三聯稍劣、故不諭之。

江以言喫不遇二聯曰、鷹鳩不變三春眼、鹿馬可迷二世情、一條帝憐之欲登庸之、然時執政忌之、故不能得官、上句唯是自己之事、下句以執政比趙高、則其所忌良有以也、執政者藤道長也、以言不憚其權而云爾、可謂有度量乎、然云爾而欲求官者、可謂不智乎、既吟此句、則避世而可也、歷年之後、以言官位稍進、則道長亦不棄其文才者、可謂奇乎、江以言遇唐人問曰、古集氏下用數字、或曰、某二某三、或曰某十一某十二、其義如何、唐人答曰、是一家子孫列次之行也、譬有一人、其人有三子、則自嫡次之、曰某一某二某三、其嫡子有子五人、則曰某四五六七八、其次、

江以言不遇を嘆ずる一聯に曰く、鷹鳩變せず三春の眼、鹿馬迷ふ可し二世の情一條帝之れを憐み之れを登庸せむと欲す、然れども、時の執政之れを忌む、故に官を得る能はず、上句は唯だ是れ自己の事、下句は執政を以て趙高に比す、則ち其の忌まるは良に以へ有るなり、執政とは藤道長なり、以言其の權を憚らず而して爾か云ふ、度量ありと謂ふべきか、然れども、爾か云ひて而して官を求めむと欲するは、不智と謂ふべきか、既に此の句を吟ぜば、則ち世を避けて可なり、年を歴るの後、以言官位稍や進む、則ち道長も亦其の文才を棄てざる者、奇と謂ふべきか。

江以言唐人に遇ひ問ひて曰く、古集氏の下に數字を用ひ、或は某の三某の三と曰ひ、或は某の十一某の十二と曰ふ、其の義如何ん、唐人答へて曰く、是れ一家の子孫列次の行なり、譬へば、一人あり、其の人三子あれば、則ち嫡より之れを次で、某の一某の二某の三と曰ふ、其の嫡子、子五人あれば、則ち某の四五六七八と曰ふ、其の次男、子四人あれば、則ち某の九十一十二と曰ふ、其の三男、

男有子四人、則曰「某九、十一、十二、其三、男有子三人、則曰「十三、十四、十五、其嫡孫有子二人、則曰「十六、十七、如此嫡庶世世以次第稱之、限以四十九、而及五十、則又稱「一二三、云云、今按此言不知其據、然以言直聞唐人面論、則可爲證乎、就想蘇二、黃九、魏十六、韓二十八、魏三十六、劉四十之類、以此解之、則不勞工夫、而其義可通。

藤爲時山莊在和泉國玉井、題一律曰「玉井佳名被世稱、松楹半接碧巖稜、山雲繞舍隨寒幔、澗月臨窓欲代燈、梅發寒花朝見雪、水收幽響夜知冰、池邊何物相尋到、雁作來賓鶴作朋。

藤爲時有文才、願任國守、不得、長德年中源

子三人あれば、則ち十三、十四、十五と曰ふ、其の嫡孫子二人あれば、則ち十六、十七と曰ふ、此の如く嫡庶世々次第を以て之れを稱す、限るに四十九を以てし、而して五十に及べば、則ち又一二三と稱す云云、今按するに、此の言其の據を知らず、然れども、以言直に唐人の面論を聞くときは、則ち證と爲すべきか、就て想ふに、蘇二、黃九、魏十六、韓二十八、魏三十六、劉四十の類、此れを以て之れを解すれば、則ち工夫を勞せずして、而して義通すべし。

藤爲時の山莊、和泉國玉井に在り、一律を題して曰く、玉井佳名世に稱せらる、松楹半は接す碧巖稜、山雲舍を繞つて、應に幔を褰ぐべし、澗月窓に臨んで、燈に代へんと欲す、梅は寒花を發いて、朝に雪を見、水は幽響を收めて、夜氷を知る、池邊何物か相尋ね、到る雁は來賓と作り、鶴は朋と作る。

藤爲時文才あり、國守に任せられむことを願ひて、得ず、

國盛任越前守、爲時獻狀、嘆其不幸、其中有言曰、苦學寒夜、紅淚霑襟、除目春朝蒼天在、眼、帝見之感、嘆憐其漏恩澤、不進玉食、淚垂御帳、時相藤道長大驚、速使國盛獻辭狀、而以爲時任越前守、爲時得志而悅、國盛涕泣而憂之、成病而卒、爲時者、紫式部父也。

圓融上皇大井河御遊、分詩歌管絃三船、群臣各乘其所長、以施其藝、藤公任併達三藝、船司問曰、君可乘何船、公任乘倭歌船、獻秀歌、旣而悔曰、倭歌者人人詠之、不如乘詩船之愈也、其後白河帝大井河行幸、又連三船、源經信乘管絃船、勸其事、而併獻詩歌、時人服其多藝、蓋聞公任之所以悔而所然乎。

藤公任白河山家眺望一聯曰、荒村日落煙

長徳年中、源國盛越前守に任ぜらる。爲時狀を獻じ、其の不幸を嘆ず、其の中に言へるあり曰く、苦學寒夜紅淚襟を霑し、除目春朝蒼天眼に在り、帝之れを見て感嘆す、其の恩澤に漏るゝを憐みて、玉食を進めず、淚御帳に垂る。時相藤道長大いに驚きて速に國盛をして辭狀を獻ぜしめ、而して爲時を以て越前守に任ず、爲時は志を得て悦び、國盛は涕泣して之れを愛へ、病を成して卒す、爲時は紫式部の父なり。

圓融上皇大井河の御遊に、詩歌管絃の三船を分つ、羣臣各其の長ずる所に乘じ、以て其藝を施す、藤公任三藝に併達す、船司問ひて曰く、君は何れの船に乗すべき、公任倭歌の船に乗り、秀歌を獻ず、旣にして悔いて曰く、倭歌は人人之れを詠ず、詩船に乗るの愈れるには如かずと、其の後、白河帝大井河の行幸、又三船を連ぬ、源經信管絃の船に乗り、其の事を勸め、而して詩歌を併せ獻ず、時人其の多藝に服す、蓋し公任の悔いし所以を聞き、而して然る所か。

藤公任白河山家の眺望の一聯に曰く、荒村日落ちて煙猶細く、遠岫雲幽にして鳥獨歸る、其の即景摸し得て好

猶細、遠岫雲、幽鳥獨歸、其卽景摸得好。

本朝所謂郭公是杜鵑也、中華賦杜鵑、多是於暮春言之、古來倭歌皆以爲夏之鳥也、藤公任郭公一聯曰、四五月交雲外語、二三更後雨中音、上句乃是本朝之氣候也、下句與中華所詠亦合、僧蓮禪一聯曰、鶯子集中春刷翅、兔花牆外曉傳聲、上句雖本於萬葉集歌、然與子美詩意偶合、則知我邦郭公乃是中華杜鵑也、中原廣俊詩曰、呼名五月雨霑裏、知汝三更夢覺間、頗耳頻迴孤竹砌、尋聲深入遠松山、其曰呼名曰入松、合中華詩曰迴竹稍奇也。

寂照入宋之後、藤伊周過其舊房、賦四韻、其一聯曰、山雲在昔去來物、魚鳥如今留守人、

し。

本朝の謂ゆる郭公は是れ杜鵑なり、中華の杜鵑を賦する、多くは是れ暮春に於て之れを言ふ、古來倭歌皆以て夏之鳥と爲す、藤公任の郭公の一聯に曰く、四五月の交雲外に語り、二三更の後雨中の音、上句は乃ち是れ本朝の氣候なり、下句は中華の詠する所と亦合へり、僧蓮禪の一聯に曰く、鶯子の巢中春翅を刷ひ、兔花の牆外曉聲を傳ふ、上句は萬葉集の歌に本くと雖ども、然れども、子美の詩の意と偶合ふときは、則ち知る我が邦の郭公は乃ち是れ中華の杜鵑なることを、中原廣俊の詩に曰く、名を呼ぶ五月雨の霑ふ裏、汝を知る三更夢の覺むる間、耳を傾けて頻に迴る孤竹の砌、聲を尋ねて深く入る遠松の山、其の名を呼ぶと曰ひ、松に入ると曰ふ、中華の詩に合へり、竹を廻ると曰ふは、稍や奇なり。

寂照入宋の後、藤伊周、其の舊房に過り、四韻を賦す、其の一聯に曰く、山雲在昔去來の物、魚鳥如今留守の人、蓋し人を以て言を廢せざるの髣髴か。

蓋不以人廢言之勢歟乎。

宋朝類苑引楊文公談苑曰景德三年日本僧寂昭入貢其後南海商船傳國王弟野人若愚左大臣藤道長治部卿源從英寄寂昭書三篇其書皆二王之跡而若愚特妙中土能書者亦鮮能及云云書史會要亦載之若愚未詳其何人惺窩先生以爲具平親王之匿名乎以其時代考之則若其然乎景德當我寬弘年中此時無曰源從英者而源俊賢爲治部卿從英蓋其草書俊賢二字之轉而誤寫者乎。

源孝道一聯曰巫陽有月猿三叫衡嶺無雲雁一行與唐詩所謂巫峽啼猿數行淚衡陽歸雁幾封書異域暗合乎若夫衡陽雁斷三

史館茗話

宋朝類苑に楊文公の談苑を引きて曰く景德三年日本の僧寂昭入貢す其の後南海の商船國王の弟野人若愚左大臣藤道長治部卿源從英寂昭に寄する書三篇を傳ふ其の書皆二王之跡而して若愚特に妙なり中土書を能くする者も亦能く及ぶもの鮮し云云書史會要にも亦之れを載す若愚とは未だ其の何人なるを詳にせず惺窩先生以爲へらく具平親王之匿名かと其の時代を以て之れを考ふるときは則ち若し其れ然らむか景德は我が寬弘中に當る此の時源從英と曰ふ者無し而して源俊賢治部卿たり從英は蓋し其の草書俊賢二字の轉じて誤寫せし者か。

源孝道の一聯に曰く巫陽に月有り猿三叫衡嶺に雲無し雁一行唐詩に謂ゆる巫峽の啼猿數行の淚衡陽の歸雁幾封の書と異域暗合か若し夫れ衡陽雁斷ふ三千路巫峽猿啼く十二峰と云ふ者孝道より後るゝときは則

三五

千路、巫峽猿啼十二峯者、後於孝道、則姑舍是、孝道者滿仲子也、其出武林遊文苑、不亦奇乎。

後一條帝第一皇女、著袴內宴倭歌之遊、大納言藤齊信作序曰、飛鳥朝者王女也、待羽翼而開鳳曆、廣野姬者公主也、契風雲以復龍興、云々、飛鳥朝者皇極之宮也、廣野姬者持統之名也、帝無皇子、故太愛第一皇女、有欲使即位之意、故用女主二朝之事、且羽翼鳳曆者、承飛鳥而言之、風雲龍興者、自廣野字說出來也。

後朱雀帝秋景何處尋御製一聯曰、路非山水誰堪趣、跡任乾坤豈得尋、先是皇后嬀子有寵、早世、帝悲慕不已、故御製如此。

ち姑く是れを舍く、孝道は滿仲の子なり、其の武林より出で、文苑に遊ぶ、亦奇ならずや。

後一條帝の第一の皇女、著袴内宴倭歌の遊に、大納言藤齊信序を作りて曰く、飛鳥の朝は王女なり、羽翼を待ち而して鳳曆を開く、廣野姬は公主なり、風雲に契り以て龍興に復す、云々、飛鳥の朝とは、皇極の宮なり、廣野姬とは、持統の名なり、帝、皇子無し、故に太だ第一の皇女を愛し、位に即かしめむと欲するの意有り、故に女主二朝の事を用ゆ、且つ羽翼鳳曆は、飛鳥を承けて之れを言ひ、風雲龍興は、廣野の字より説き出し來るなり。

後朱雀帝秋景何の處にか尋ねむの御製の一聯に曰く、路は山水に非ず誰か趣に堪へむ、跡は乾坤に任す豈に尋ぬるを得むやと、是れより先き、皇后嬀子寵あり、早世す、帝悲慕して已まず、故に御製此の如し。

藤明衡春日遊東光寺一聯曰柳助翠煙茶
籠暮花添紅雪藥爐春讀得恰好助添二字
著意。

藤實範遊長樂寺一聯曰莓苔石滑路猶遠
松栢山寒枝不長此亦可喜下句稍奇。

宗孝言有詠螢排律其中四聯曰變化有時
生腐草浮沈不定度清流閑庭燈舉無消雨
合浦珠還似感秋亂過孤叢來水閣飛交一
葉類漁舟望光屢誤截星節翫景方疑秉燭
遊其形容稍好然燈燭竝用爲贅節字不穩
大江佐國太愛花遊長樂寺翫花吟曰迎老
蹉跎雙鬢雪見花染著九春風又雲林院花
下吟曰一道寺深花簇雪數奇命薄鬢垂絲
又詠庭前櫻曰庭上兩三樹洛陽第一花又

藤明衡の春日東光寺に遊ぶ一聯に曰く柳は翠煙を助く
茶籠の暮花は紅雪を添ふ藥爐の春讀み得て恰好助添
の二字意を考く。

藤實範の長樂寺に遊ぶ一聯に曰く莓苔石滑にして路猶
遠く松栢山寒うして枝長からず此れ亦喜ぶべし下句
稍や奇なり。

宗孝言に螢を詠する排律あり其の中の四聯に曰く變
化時有つて腐草に生じ浮沈定らず清流を度る閑庭燈
舉つて雨に消ゆる無し合浦珠還つて秋に感ずるに似たり
亂れて孤叢を過ぎて水閣に來り飛んで一葉に交つて
漁舟に翹す光を望んで屢誤る星を載するの節かと景を
翫びて方に疑ふ燭を乗つて遊ぶかと其の形容稍や好し
然れども燈燭竝び用ゐるを贅と爲す節の字穩ならず
大江佐國太だ花を愛す長樂寺に遊びて花を翫ぶ吟に
曰く老を迎へた蹉跎たり雙鬢の雪花を見て染著す九
春の風又雲林院の花下の吟に曰く一道寺深うして花
雪を簇らし數奇命薄うして鬢絲を垂る又庭前の櫻を
詠じて曰く庭上の兩三樹洛陽の第一花又手づから栽

喜手栽梅開曰、隨分他年栽此樹、豈圖今日見其花、晚年吟曰、六十餘回看不足、他生定作愛花人、佐國沒後、其子夢亡、父來告曰、我化蝶、每春遊翔於花園、其子不堪追慕、栽衆花、每房塗蜜以供群蝶云。

藤實範、藤明衡、宗孝言、勸同韻、賦庭前松竹、實範詩曰、數年抽節書窓北、千載契齡賓閣南、移得根辭湘浦浪、擡來蓋揖泰山嵐、疎籬曉露白如玉、斜岸暮煙青、自藍琴曲入風絃、調七酒盃酌乘算、過三、明衡詩曰、千歲低枝當座右、一叢細葉鎖蒼南、洗來宜卷籬間露、移得自忘澗底嵐、孤蓋凌霜青似栢、數竿侵雪綠於藍、蒼林尋隱賢、猶七、秦嶺思封爵、是三、孝言詩曰、淇園風跡傳窓北、秦嶺雨聲瀉

る梅の開くを喜びて曰く、隨分他年此の樹を栽う、豈に圖らむや、今日其の花を見むとは、晩年の吟に曰く、六十餘回看れども足らず、他生は定めて花を愛するの人と作らむと、佐國没して後、其の子夢むらく、亡父來り告げて曰く、我れ蝶に化して、毎春花園に遊翔すと、其の子追慕に堪へず、衆花を栽え、房毎に蜜を塗りて以て羣蝶に供すと云ふ。

藤實範、藤明衡、宗孝言、同韻を勸して、庭前の松竹を賦す、實範の詩に曰く、數年節を抽んづ書窓の北、千載齡を契る賓閣の南、移し得て根辭す湘浦の浪、擡げ來つて蓋揖す泰山の嵐、疎籬の曉露白うして玉の如し、斜岸の暮煙藍よりも青し、琴曲風に入つて絃七を調べ、酒盃葉を釣んで算三を過ぐ、明衡の詩に曰く、千歳の低枝、座右に當り、一叢の細葉、蒼南を鎖す、洗し來つて宜しく卷くべし、籬間の露、移し得て自ら忘る澗底の嵐、孤蓋霜を凌いで栢よりも青し、數竿雪を侵して藍よりも綠なり、蒼林に隱を尋ねて賢猶七、秦嶺に封を思ふて爵是れ三、孝言の詩に曰く、淇園の風跡、窓北に傳はり、秦嶺の雨聲、戸南に瀉ぐ、養ひ得て數竿、夜露を垂れ、栽え來つて百尺、晴嵐を帯ぶ、

戸南、養得數竿垂夜露、裁來百尺帶晴嵐、疎籬貞節尚含綠、斜岸靈標如染藍、稱友鳳棲雛、契久爲君爵品欲誇三、三篇竝看則實範、明衡相爲伯仲、孝言稍劣。

後三條帝在東宮、時藤實政爲學士、侍讀年久、既而任甲斐守、帝餞之、賜詩曰、州民縱作甘棠詠、莫忘多年風月遊、及卽位、實政頻被登庸。

延久年中伊勢齋宮寮畔有狐祠、邑民祭之如神、其狐偶中矢而傷、或曰既死、或曰未死、參議源隆綱記其事作文、其中有言曰、雖有飲羽之號、未見首丘之實、帝見之、感其採用古語之才。

白河帝御宇、高麗王病、令其禮賓省贈牒於

疎籬の貞節尚綠を含み、斜岸の靈標藍に染むるが如し、友と稱する鳳棲久しきを契ると雖ども、君と爲る爵品三に誇らむと欲す三篇竝び看れば、則ち實範明衡伯仲を相爲す、孝言は稍や劣れり。

後三條帝東宮に在り、時に藤實政學士と爲りて、侍讀年久し、既にして甲斐守に任ず、帝之れを餞し、詩を賜ひて曰く、州民縱ひ甘棠の詩を作るとも、多年風月の遊びを忘るゝこと莫れ、位に卽くに及びて、實政頻に登庸せらる。

延久年中、伊勢の齋宮寮の畔に狐祠あり、邑民之れを祭ること神の如し、其の狐偶、矢に中りて傷つく、或は曰く、既に死すと、或は曰く、未だ死せずと、參議源隆綱、其の事を記して文を作る、其の中に言へるあり、曰く、飲羽の號ありと雖ども、未だ首丘の實を見ずと、帝之れを見て、其の古語を採用するの才に感ず。

白河帝の御宇、高麗王病む、其の禮賓省をして、牒を太宰

太宰府求良醫於我邦、依允恭帝求醫於新羅之舊例也、宰府奏覽之、然以其牒詞失禮、故返其方物、不遣醫、而使江匡房作返牒、其中有雙魚難達鳳池之月、扁鵲何入鷄林之雲之句、匡房自負之、時人亦感之、高麗人亦奇之、傳到宋朝、亦被稱云。

九月十三夜月、中華不賞之、唯本朝特翫之、然倭歌之遊不違枚舉、關白藤忠通作詩曰、潘室昔蹤凌雪訪、蔣家舊徑踏霜尋、十三夜影勝於古、數百年光不若今、又曰、訪古無如今、夜影經年豈忘此、時光洛中各領吾家雪、塞外定疑萬里霜、此二首題曰、九月十三夜翫月、先於忠通、有宗孝言、藤知房、輔仁、親王翫月之詩、其句中用十三夜之事、孝言者後

府に贈り、良醫を我が邦に求めしむ、允恭帝、醫を新羅に求むるの舊例に依れるなり、宰府之れを奏覽す、然れども其の牒詞禮を失するを以て、故に其の方物を返して、醫を遣らず、而して江匡房をして返牒を作らしむ、其の中に、雙魚鳳池の月に達し難し、扁鵲何ぞ鷄林の雲に入らむの句あり、匡房之れを自負す、時人も亦之れに感ず、高麗人も亦之れを奇とす、傳へて宋朝に到りて、亦稱せらるると云ふ。

九月十三夜の月、中華には之れを賞せず、唯だ本朝特に之を翫ふ、然れども、倭歌の遊、枚舉に違あらず、關白藤忠通詩を作りて曰く、潘室の昔蹤雪を凌いで訪ひ、蔣家の舊徑霜を踏んで尋ぬ、十三夜の影、古に勝れり、數百年光今に若かず、又曰く、古を訪ふに今夜の影に如くは無し、年を経て豈に忘れむや、此の時の光、洛中各領す、吾が家の雪、塞外定めて疑はむ、萬里の霜、此の二首、題して、九月十三夜月を翫ふと曰ふ、忠通より先きに、宗孝言、藤知房、輔仁、親王の月を翫ふの詩有り、其の句中、十三夜のことを用ゆ、孝言は、後朱雀帝の時に及第す、然れば、則ち十三夜の詩由りて來ること久し。

朱雀帝時及第、然則十三夜詩由來久矣。

本朝朝士之作詩、多是倣白氏體、故不斥其名、唯稱文集、或曰、居易存時、其集既傳來、或曰、會昌年中、我國僧惠萼入唐、滯留之間、寫之而歸朝、由是遍行于世、然空海傳來王昌齡集、昔相讀元微之集、慕溫庭筠詩、且江維時所輯本朝佳句、公任朗詠、雜載李嶠、王維、劉禹錫、皇甫會、許渾、杜荀鶴等句、江談抄引盧照鄰句、載杜少陵事、則豈唯白集而已哉、先輩所見、雖不多、然能勤而記憶之、故爲廣才、今人每家多書、然不勤讀、不記憶、與反古堆齊、若其勤而不怠、則今豈可劣於古哉。

右五十八件併前共百條。

十者一之積也、百者十之盈也、數之盈豈限

本朝朝士の詩を作る、多くは是れ白氏の體に倣ふ、故に其の名を斥さず、唯だ文集と稱す、或は曰く、居易存する時、其の集既に傳へ來ると、或は曰く、會昌年中、我が國の僧惠萼入唐し、滯留の間、之れを寫し而して歸朝す、是れに由りて、遍く世に行くと、然れども、空海、王昌齡の集を傳へ來り、昔相讀元微之の集を讀み、溫庭筠の詩を慕ひ、且つ江維時の輯むる所の本朝佳句、公任の朗詠、李嶠、王維、劉禹錫、皇甫會、許渾、杜荀鶴等の句を雜へ載す、江談抄に、盧照鄰の句を引き、杜少陵の事を載するときは、則ち豈に唯だ白集のみならむや、先輩の見る所、多からずと雖ども、然れども、能く勤めて而して之れを記憶す、故に廣才と爲す、今の人每家書多し、然れども、勤めて讀まず、反古堆と齊し、若し其れ勤めて而して怠らざれば、則ち今豈に古に劣るべけむや。

右五十八件、前を併せて共に百條。

十とは一の積なり、百とは十の盈なり、數の盈つる、豈に

十百哉、積而爲千爲萬、亦數之積而盈也、茗話之無盡、猶物數之無窮也、何可限百哉、有說於此曰、李唐才子豈百而已、然不編百家詩哉、我邦之歌人亦豈百而已、然不見小倉百首哉、史館茗話之記百件、亦有所徵、姑茲投筆、百話既成、乃想所以由作、則爲足亡嗣之志也、一件一淚、泣而記、記而泣、誰知百話出自百憂哉、丁未夏之孟、國史館林叟跋。

十百に限らむや、積みて而して千と爲り、萬と爲るも、亦數の積みて而して盈つるなり、茗話の盡くること無きは、猶物數の窮り無きがごときなり、何ぞ百に限るべけむや、此に說あり曰く、李唐の才子、豈に百のみならむや、然れども、百家詩を編せざらむや、我が邦の歌人亦豈に百のみならむや、然れども、小倉百首を見ずや、史館茗話の百件を記する、亦徵ふ所有り、姑く茲に筆を投ず、百話既に成り、乃ち由りて作る所以を想へば、則ち亡嗣の志を足すが爲めなり、一件一淚、泣きて而して記し、記して而して泣く、誰か百話の百憂より出づることを知らむや、丁未夏の孟、國史館の林叟跋す。

史館茗話 終

大正九年一月二十日印刷
大正九年一月廿三日發行

日本特許證書 第一卷

非賣品

編輯者

池田四郎次



發行者

立田義元

印刷者

高木鳥三

印刷所

株式會社 秀英會 第一工場



發行所

東京市神田區
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
接發東京三五一三番